

## 有島武郎：「一房の葡萄」

有島武郎「一房の葡萄」の主人公「僕」は友だちのジムが持っている絵具がうらやましいと思っていました。

私は「僕」の気持ちが、とてもわかります / 少しわかります / わかりません / ぜんぜんわかりませんでした。

なぜなら、(自分や友だちのうらやましいと思った体験など) だからです。

「僕」はとうとうジムの絵具を盗んでしまいます。「僕」はすぐに本当のことを言わず、絵具を盗んだことが  
わかってしまっても素直にあやまりませんでした。私は だと思いました。

なぜなら だからです。

先生に聞かれたときも素直に謝るチャンスだったのに、先生にいやな奴だと知られたくないために  
本当のことをいわずに泣き出してしまいました。私は「僕」の なところが  
だと思いました。

もし、自分が悪かったとすぐに謝っていたら だったと思いました。

私なら / も するだろう / できないだろう だと思いました。

私も (謝らなければならない出来事) があったときに、  
という気持ちになりました。

そのときは、 だと思いました。

今 / あとになって考えると、 だったと思います。

先生は「僕」に葡萄を一房渡しました。「僕」はとても食べる気になれないと言ったのに家に帰ると、  
おいしく喰べてしまう様子は、とても / 少し だと思いました。

もし私が 友だち / 先生 / 「僕」なら、 だと思いました。

次の日「僕」は具合が悪くなって学校を休みたいけど、いやいやながら家を出ます。  
私は だと思いました。

先生の説得で、絵具を盗られたジムの方から「僕」に歩み寄り、手を引いて先生の部屋へ行きました。  
もし私がジム / 先生なら する / しない / 感じる のにと思いました。

「僕」は最後までジムに「ごめんなさい」と謝りませんでした。私は「僕」 / 先生 / ジムの気持ちが、  
少しだけ / ちょっと / なんとなく / すごく / とってもよく わかります / わかりません。

私は、謝らない「僕」を / 許すジムの だと思いました。

この本を読んで、私は ではないかと思いました。 / 考えました。